

## Die kleine Ida

小さな **Ida Augustin** は、私の未来のママで、幼年期を、農家で過ごした。この家には、様々なものがあつた：納屋や、パンジーやエゾギクに満ちた前庭や、12人もの兄弟、鶏のいる中庭、キルシュやプラムに満ちた古い果樹園、馬小屋、沢山の仕事に長い通学路といったものである。というのも、学校は隣村にあつたからだ。そして、隣村の学校では学ぶべき事はあまり沢山なかつた。というのも、そこにはたった1人の先生と2つの教室しかなかつたからだ。一方の教室には、7歳から10歳の子供がおり、もう一方の教室には11歳から聖信札を受けるまでの子供がいる。そこでは、読むことや書くこと、計算以外に得るものは何一つなく、利口な子供にとっては、そこはひどくたいくつであつた！同じ教室での4年間は、死ぬほど退屈であつた！

冬には、時々雪が高く積もるので、玄関のドアが開かなかつた！だから、子供達は、学校へ行こうとするときには、窓をよじ登らなければならなかつた。もしくは、私のおじいさん(=Idaの父親)が、彼等に行つて欲しいと思ふときも！雪(がある)にも関わらず、ドアが開けられる時には、シャベルでもつてトンネルを掘らねばならず、それから子供達はそこを這つて這つて進む！それは確かにまったくもつて愉快だが、愉快な気分は長くは続かなかつた。なぜならば、風が凍つた様に冷たく野を吹くからだ。雪の中には腰まで沈んだ。指やつま先、耳が凍え、涙が目には吹き出してくるほどであつた。そして、最後にずぶぬれになると、半ば凍傷にかかつて学校に到着し、学ばれるべき何か深く、興味深いものでさえも存在しなかつた。

全てのものが **Ida** を不機嫌にさせたわけではない。彼女は窓からよじ登つた。彼女は雪のトンネルを這つて進んだ。彼女は凍えて通学路でめそめそ泣いた。それはわずかししか影響がなかつた。なぜならば、彼女は知識を渴望していたからだ。彼女は、年老いた先生自身が知つていたことすべてを学ぶつもりであつた。そして、彼(=先生)は、たとえ大して多くのことを知らなかつたとしても、それでもやはり小さな **Ida** よりは少しばかり多くのことを知つていたからだ！

彼女の年上の兄・とりわけ **Franz, Robert, Paul** は、学校や学習に対して完全に他の見方を持つていた。彼等は教室の中で座つてゐることを時間の無駄と考えていた。将来必要となるであろう、わずかな読みや綴り書きは、あつという間に身につけていた。計算は？私が思うに、3人の少年は、すでにゆりかごの中で、「母」や「父」といった単語を発音できる様になる前には計算が出来ていた。計算が出来るといふことは、彼らには生まれつきのことであつた。まるで呼吸や見ること、聞くことのように。

こうした理由から、通学路は家から遠ざかるにはたしかに役立っているが、彼等はしばしば、他のところに到着し、決して学校には行かない！彼等はどこをうろつき周り、何をしでかすのだろうか？寂しい草地でサッカーをするのだろうか？何かを投げて窓ガラスを壊すのだろうか？噛み付く癖のある番犬を怒らせ、猫を引っ張り出すのだろうか？そのよ

うなことは、当然、いつも避けられるわけではない。しかし、主として、村の小学校で座っている代わりに、彼等はあることを行う：彼等は、イエウサギを商うのだ！

当然、彼等はすでに、どちらかといえば馬を売りたいかった！しかし、馬は気難しい動物で、木箱に隠すにはあまりにも大き過ぎた！その上、イエウサギは、周知の様に、「イエウサギの様に」自らを増やす。絶え間なく、イエウサギ達は子供を産む。かわいらしい動物が満腹になり、たくさん子孫を生み出すために、わずかばかりのニンジンやレタスの玉を見つけさえすればよかった。

ところで、3人の兄たちは、なくてはならない飼料を見つけ出していた。私は、彼等は(代金を)一度も支払っていなかったと推測する。安く買い入れる人は、安く売ることも出来る。商売は栄えていた。Augustin 兄弟は、長いこと、Kleinpelsen とその周辺に、たくさんイエウサギを供給してきたので、その挙げ句最後には、商いの噂が私の祖父の耳まで届いた。彼は、そう思って然るべき程度には、息子達のことを、誇りには決して思わなかった。そして、祖父(=息子達の父)が息子達を弁明させたとき、両腕が痛むまでさんざんに殴った後でも沈黙が続いたので、Ida を呼んで叱りつけた。彼女は私の祖父に知っていたことを伝えた。そして彼女は色々なことを知っていた。

Robert、Franz、Paul は全く気に入らなかった。それゆえに、彼等はそのあとで引き続いて内々に妹と話し合いをした。そして彼等は、はじめに緑色、それから黄色くなったあざが青くなり、それが再び消えてしまうまでの長い間、話し合いを続けた。

結局のところ、青いあざを除いて、話し合いは成果無く終わり、それはまるで国際会議の様であった。妹は、父親は真実を知ろうとしていて、そしてどんなことがあっても(兄たちは)真実を言わなければならないと説明した。そのことは家や学校で学ぶのだ。しかし、3人の兄たちは、家や学校で知るといことはとてもめずらしいので、この見解を共有することが出来なかった。彼等は、Ida が告げ口したのだと言った。彼女(Ida)は決してよい仲間でもまともな妹でもない。そして彼等は恥ずかしいと思わなければならないと(Ida は言った)。

もしわんぱく小僧が素直ならば、模範的な少年ならば、小さな Ida は告げ口しなかったに違いない。しかし、商いの心は生まれつき備わっている。Ida の父は馬を扱っていた。兄たちは、学校へ行く代わりに、イエウサギを売っていた。誤ったことだろうか？

良心の呵責があった唯一の人物は、小さな Ida であった！なぜ？彼女は素直に学校へ行っていた。彼女は家で仕事をいろいろと済まし、小さな妹の面倒を見て、そして、人が尋ねると真実を話した。誤ったことだろうか？